

町家を生かしたまちづくりを地域住民が推し進める「御所まち」～御所市～

大和平野の西南端に位置する人口約3.2万人（平成19年）の都市、奈良県御所市の中心にある「御所まち」は、古く江戸時代には街道の交差点にあり、菜種油など物資の中継地として、また木綿の大和緋（かすり）の生産地として栄えていた。しかしながら現在は、人口の減少や高齢化の進展などの諸問題によって活気が失われてきている。

御所まちには、江戸時代の中・後期から明治時代にかけて建てられた町家が今も多く残っており、このまちなみを生かしたまちづくり活動が、地域住民を中心にしたNPO等の手によって行われている。

御所まち

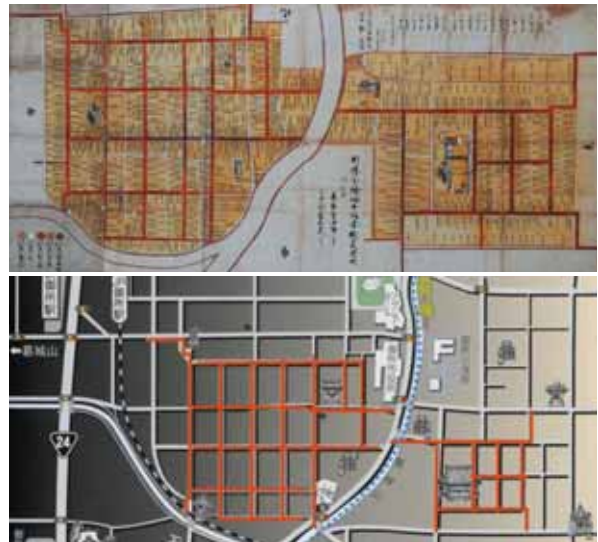
江戸時代の「御所まち」は街道の交差点にあり、町中を走る高野街道を北上すると、竹内街道を経て大坂や伊勢に通じ、南下すれば和歌山へ通じる大和街道や吉野を東西に通る伊勢南街道に繋がっていた。そのため、物資の中継地として、そして大和緋の生産地としても繁栄していた。また、西国札所巡礼や伊勢信仰のおかげ参りの折りにも各地から多くの人々が集まってきたという記録も残っている。

江戸時代、大和（現在の奈良県）にあった集落の多くは「村」で、「町」が付くのは、「御所」「奈良」「郡山」「今井（橿原市）」の4つしかなく、このことから往時の御所の繁栄を窺い知ることができる。

御所まちは堀や堤防でめぐらされる環濠集落であり、南北に流れる葛城川によって「西御所」と「東御所」に分けられ、西御所は商業的町場として、東御所は官庁街・寺内町として発展した。

現在の御所まちは御所市の中心市街地にあり、東西750m、南北300mの範囲に当時の面影を残した重厚な町家が軒を連ねている。

「御所町検地絵図（寛保2年（1742年））」に書かれた江戸時代の道路や水路（環濠）を現在の地図と見比べてみると、ぴったり重なっていることがわかる。それは、江戸時代に形成された環濠集落が、家のみだけでなく道や水路までが、ほぼそのままの状態に今に残っているということである。このようなケースは他ではほとんどみられないという。



「江戸時代の御所まち」（上）と「現在の御所まち」（下）

まちづくり活動の起源

まちづくり活動は、平成4年頃から行われた商工会による「まちおこし」事業に始まる。それ以前からも地元の商工業者の中で町の衰退が懸念され、様々なイベントなどが行われていたが、住民の大半が「御所なんか」「どうせ御所やもん」といった、あきらめムードが漂っていた。

御所市商工会では「まちおこし」のための先進地視察や研修会を繰り返してきたが、平成9年に、「まちおこし」ではなく、「まちづくり」への転換が必要なることを認識した。これを踏まえ、商工会商業部会御所支部では「行者街道事業」を、同青年部では「おづぬプロジェクト」を考案した。両事業のタイトルは、山岳信仰の開祖で全国に名を馳せた「役行者」と幼少の頃の名、「役小角」にちなみ、御所を全国に誇れる町にしたいとの思

いで、まちづくりの考え方を示したものである。中心には「人」があって、「まちづくりの基本は人づくり」であることを示している。

こういった活動を始めた折、まちなかに観光客の人達が、ちらほら訪れるようになった。この寂れた町にどうして訪れたのかを尋ねると、思いがけない返答が返ってきた。それは、「このまちなみはとても素晴らしい」「きれいな町」などの絶賛の言葉であった。それは観光客の社交辞令かと思っていたが、地元の有志メンバーでまちを歩いて見て回ったら、普段何気なく見ていた町並みも素晴らしい素材であることに気がついた。

そして、疲弊していたまちの活性化のために立ち上げられたのが第1回霜月祭^{そうげつさい}であった。

役行者…修験道の開祖。金剛・葛城の山々で修行を重ね、全国に修行場を開いたとされ、御所まち東にある吉祥草寺^{きっしょうそうじ}が生誕地とされている。



御所まち一体に町家が点在している

霜月祭

霜月祭は平成11年に第1回が開催され、本年度で9回目を迎える。役行者の縁を大切にし、生誕地である吉祥草寺の事業に合わせて期日は毎年11月の第2日曜日と定め、商工業者だけでなく、自治会・婦人団体・各ボランティア団体など、多くの協力者によって運営されている。

開催当日は、御所まちに点在する文化と歴史の宝庫である町家が「町家ミュージアム」として特別公開され、普段は生活の拠点であるため見ることができない貴重な資料を見ることができる。公開される町家の数は年々増加し、平成18年には17軒を数える。

また、霜月祭では町家ミュージアムをはじめ、地元人の芸術作品を展示した「街かどギャラリー」や商家の蔵を会場にした「蔵シックコンサート」、葛城山麓で栽培されたソバ粉と湧き水で仕上げられた「行者そば」の販売など、地元の資源を有効に利用した催しが多数開催されている。さらに、20名のボランティアガイドが会場をくまなく案内してくれる。



町家ミュージアムを案内するボランティアガイド

「町家ミュージアムで見ることのできる、いわゆる『お宝』は、実は御所まちに住む住民でさえ見たことがないようなものもあります。霜月祭は1日限りの開催なので、自分自身の町家を公開すると、他の町家を見に行けないといった悩みも最近聞かれます」（霜月祭実行委員長、東川裕氏）。

霜月祭は特別大きなPRを行っているわけではなく、御所市内全戸配布のパンフレットが主な広告媒体である。しかしながら、クチコミで噂が広まり、はるばる遠方からの来場者もある。最近では大手広告代理店によるパックスツアーも登場した。

「霜月祭を商売のネタにするのではなく、町全体のイベントにしないといけない。また、多額の補助金をもらって行政主導で行っていくのではなく、あくまでも地域の人々が中心になって取り組むものでなければならない」と東川委員長は語る。



霜月祭のパンフレット

NPO法人「ごせまちネットワーク・創」

転出による人口の減少や少子高齢化の進展によってまちとしての活気が失われつつあった自分たちの地域を、このまま何もせずに眠らせておいていいのだろうか？ 遺産を守るだけでなく、今、このまちに暮らす人が互いに力を出し合えば、よいまちにできるだろう。

そんな気持ちを持った住民の有志が霜月祭などの事業をきっかけに、町家を核とした「まちづくり」を広げていこうという目的で平成15年9月に設立されたのがNPO法人「ごせまちネットワーク・創」である。

名前の「創」には「無気力」や「あきらめ」か

ら脱して、みんなの力を結集し生き生きとしたまちを「創造」していこうという思いが込められている。

最初のまちづくり活動として、奈良女子大学上野研究室による、まちなみ調査が平成16～18年度に行われた。

「ごせまちネットワーク・創」では、今後の活動方針として、御所まちに暮らす人々がまちなみ景観を保全・発展できるような新築・改築に関する情報提供や、行政・専門家への橋渡し役を目指している。また、地域の特産品づくりとインターネットを使った販売も検討。さらに、御所まちの歴史・伝統・文化の情報について地域だけでなく全国に向けて発信していく計画だという。

NPO 法人ごせまちネットワーク創

〒639-2206

奈良県御所市 60-21 (御所市商工会館内)

tel : 0745-65-1201 fax : 0745-65-1834

e-mail : sou@gosemati.net

「御所まち」のまちなみ

以下に「御所まち」のまちなみなど貴重な資源の一部を紹介する。

◆中井家住宅

霜月祭「町家ミュージアム」のひとつ。

中井家は屋号が「茶売屋」。茶に限らず、さまざまな商品を扱ってきたとい



われるが詳細は不明である。文政3(1820)年から天保13(1842)年まで庄屋を務めていた。主屋は寛政4(1792)年の建築と判明している。主屋と座敷棟、南側土蔵の3件が平成19年6月に、御所市では初めて国の登録有形文化財になった。

◆背割り下水

碁盤の目状に道路が整備され、建物の背中合わせのところに下水道が掘られている。下水道にはさまれた区間が町割りの基本となる。



◆瓦の数々

近隣に瓦の産地があったことから、多種多様の瓦が使われている。瓦の一つ一つに様々な細工が施され、随所に瓦職人の匠の技がみられる。



◆^{かん}環金具

玄関に打ち付けられた馬や牛をつなぐ金具。御所まちでは、まちのあちこちに見受けられ、頻繁に行き交った往時の行商・運搬の光景が偲ばれる。



◆まちへの入り口

旧御所まちへの4隅の入り口は、敵からの侵入に備えるため鉤型になっていた。現在は新しい道がつけられ、西町の角にその後を残すのみとなっている。



◆旧郵便局



庇の上に
干マークが見える



レトロな雰囲気醸し出す旧郵便局

〜^{ごしょがき}御所柿〜

現在の甘柿のルーツである「御所柿」は江戸時代以前に御所の地で生まれた。上品な甘さとなめらかな食感で、皇室にも献上された由緒ある柿である。また、俳人正岡子規が特に好んで食したと伝えられ、子規は「ホトトギス」で「くだもの御所柿を食ひし事」と記している。



「御所まち」の今後

最近ではカメラや画材道具を持ち、町並みを記録しようと御所まちを訪れる人が随分増えた。「霜月祭」も年を重ねるにつれ来場者が増加して、平成18年は来場者数が1万人を超えた。

地域住民の意識も変わりつつある。御所まちの貴重な財産を後世に伝えていかなければならない。そういった意識が地域に広まってきている。

昔も今も変わらない道路網や水路、昔ながらの町家は、その地に暮らす人々にとっての誇りである。先人たちが守ってきた貴重な遺産をそのままの形で後世に残していかなければならない。それが御所まちに暮らす人々にとっての使命なのかもしれない。(丸尾、井阪)